語法書に書いてある語法だらう。」

事實は全くさうであるが、語法を學ぶと、(語法書によりて)自分の文に語法上の誤謬がないといふ自信が出來て、これがいふにいはれぬ嬉しさを感じさせるものである。悲觀するものは慰めて、再び煩悶に陷らせないやうにするのが教師の慈悲である。

修辭法
- 語句に關する修辭
- 想の結構に關する修辭

兒童が修辭に關することを何によつて學ぶかといふに、日常の談話・演說をはじめ、讀破する文章中より具體的に學ぶのである。兒童は語法に發する歎聲を、修辭法にもらすことがあるが、教師が之に對する態度は語法と同一でよい。しかし修辭法を學べば、おのが文の美・不美を批判するのに、確固たる自信が得られる。

想の結構
- 起首
- 中要
  - 追歩式
  - 散列式
  - 頭括式
  - 後括式
  - 兩括式
- 結尾

結構を教授する教師の態度は、全く之に準據せよと說くのではなくて、之を自由につかひこなせと教ふるのである。式に終止せずして、それ以上に超越せよと授くるのである。

文語文

高等科兒童の綴り方に關する疑問は、多くこれらの中に落つべきものである。しかし兒童も教師も共に惑つてゐるかと思はれる問題は、文語文と候文とである。

文語文　等しく文語文といふけれども、漢文を直譯したやうなものと、和文の系統をひいてをるものとは之をよむ氣分が全く違ふ。余は高等小學綴り方一學年用中には落合直文氏の石の寶殿(播州名所)と、今井匡之氏の江の島とを引例し、二學年用中には日本外史中の重盛父を諫むといふ條を直譯し、落合・小中村兩氏合著、家庭歷史讀本中の同條を引例しておいた。要するに漢文系は雄健で、和文系は優麗である。吾人は文語文を書くのに、標準が二つあるやうに思はれて、屢々迷ふが、さればとて彼此を混じて、折衷の一體とすることも、油と水とかきまぜるやうな感がうかぶ。そこで今はなるべく折衷を理想とするけれども、時に漢文調が勝つこともあれば、和文調の勝つこともあるとおもふ。之に異議をさしはさむものは、文語文で卒業式の祝辭、又は花見の記を書いてみるがよい。その間に自ら漢文調に流れるものと、和文調に流れるものとが出來る。これ祝辭は自然雄健なるべく、花見は自然婉麗なるべきであるからだ。とにかく文語文に二系統ある結果が、こゝに至らしめてをることを知らせなければならぬ。

候文

候文　候文にも種々の體がある。

驚こそまだなかね、としの初は何事もあらたまりぬるを。わが國文のみ去年のまゝにてあられんやと、ひとりごとするをりしも、御文はとゞきぬ。うち見れば、兄にも同じ御心にや、國文にかゝはれる書どもの註釋せばやとの御こと、極めて御同意になむ。その註釋は何よりはじめたまはむとすらむ。愚見には、從來あるものを後になし、なきものをさきにし、この際まづ大鏡・榮花物語・增鏡などやよろしか

らむと思ひはべり。御考はいかに。おほせのごとくみぞれふりて、風猶さむけれど、南窓なる例の寒梅は大かたさきぬ。今年も鶯より先にとはせたまへや。早々。（落合直文氏の書簡）

桂魄團々、逐宵其の佳妙を極む。思ふに今夕はこれ望なり。豈一年の好時ならずや。須らく酒あるべく友あるべく、而して尤も佳作あるべし。即ち聊か蕪燕を倭屋に張る。知らず高雅の賁臨を辱ふするを得んや、否や。伏して佳答を乞ふ。（高等作文大全）

これ等を極端な例として、當今一般に用ひられる候文及び口語體の書簡文がある。書簡文は對者の定まつてゐる文章で、對者の趣味に應じて、和文調を用ひても、候文でも、口語體でもよいが、普通には候文か口語體かがよい。何事にでも事々しいことを好むやうな風は、なるべく助長しないやうにするがよい。兒童がもし書簡文體について質問したら、世間一般の體に從ふべきことを主として說かねばならぬ。

五　鑑　識

高等科に於ける教師の活動は、主としで鑑識の指導である。鑑識は勿論趣味に關する問題で、各人それぞれに差異はあるが、要するに教師の趣味に同化するのである。これは綴り方のみではなく、教育といふ事は、教師と相似形の人物をつくるといふ以外に何の意義もない。

次の文を見て、よいといふ者もあらう。馬鹿〳〵しいといふものもあらう。余は二文ともに尋五としては逸品であると思ふ。

○化　石

僕は一月の中頃、理科で化石の事をならつた。そして大竹君から化石を見せてもらつた。僕はそれがほしくなつた。

その翌日、高木君とかだんにいつて、土をかためて、木の葉などを上からはりつけた。そしてその上にセメントをぬりつけて化石を造らうと思つた。若し出來上つたら、それを高木君との記念物にしておかうと思つた。

その事を今かんがへて見ると、腹をかゝへるほどをかしく思ふ。あゝくだらないことをしたものだ。

○僕の學業

僕は體操がいたつて下手である。

いつも「金はおしりが大きいから、きかい體操が下手なんだ。」とか、「頭が大きいから、かけつこがのろいのだ。」とか、ひやかされてゐる。ある日體操の時間に、「しり上りで、伏し下りをしろ。」と、二宮先生の命令。僕は又あの苦しいのかとぞつとした。番はまはりまはつて、こんどは僕になつた。

「上れ」僕は「ぎつ」と鐵棒に下がつた。しかしこれからはどうにもかうにも重いしりで、ちつとも上らない。二宮先生におしりをおしていたゞいて、やう〳〵の事で上つた。「おりよ」僕は前へ下つたが、足がうごかない。

力一ぱいに足をふつたら、ずどんと前にすべり、鼻の頭と、おでこのまんなかと、口びるとをすこしづつきつた。

「おゝいたい。」大木さんは僕の手をひいて、洗場へつれていつてくれた。顏を洗つたら、血が手につい

てゐるのでしく〳〵とべそをかいた。それから又二宮先生の前へいつたら、「鼻はもげなかつたか。」とおつしやつたので、僕も「ぷつ」とふきだした。

僕はうまれだち體操が下手なのだから、これからうんとけいこをしようと思ふ。

鑑識の第一歩

鑑識の第一歩は、文章を通讀して、何處となくよいとか、何處となくまづいとか、直覺的に判定するのである。この判定は大低過まらぬものである。吾人の語感は實に美妙なもので、理論以上を常に働いてゐる。兒童より大人に至るまで、「何處となく」といふ以上に、表明し難いことは屢々ある。

結構

次に文の結構はいかにと見ていく。

「僕は體操がいたつて下手である。」

といふ記事と、

「僕はうまれだち體操が下手なのだから、これからうんとけいこをしようと思ふ。」

といふ結尾とは、相照應してよくきいてゐる。さらに、

友人の嘲罵。

先生のおかげで鐵棒に上る。

失敗。

友の厚意。

などいふ段落になつて、こゝには體操に對する作者の苦心がよくあらはれてゐる。まづ結構としては申分がない。

語句の調和

誤用

次には語句の調和いかにと見るのである。異様の感を呼ぶ語句、又はいひまはしの目立つものは、文の缺點に數へられるのである。尋五六以上高等科などになると、耳遠き語を用ひ、異様のいひまはしを一つおぼえると、それを所々に用ひる。これ等は衒氣のなす業で、止を得ぬ事ではあるが、それらを觀破して、所謂眼光紙背に徹するといふのが鑑識の極意である。

次には文の破格・修辭上の誤用にすゝみ、さらに文字・句讀・送り假名・假名遣の誤り等の發見に入るのである。これ等を文の添刪・訂正などといつてゐるが、缺點を除去しても、文がすぐれてよくなるといふ譯ではない。つまり鑑識は文の美點・缺點のすべてを發見するの意で、美は益々美に、缺點は之を訂正するのである。高等科の綴り方は、教師が兒童の自作・題作したものについて、兒童と共にこの鑑別を行ふのが、重要な仕事である。

我が校の教授細目

教授細目の二種

附說

綴り方教授細目につきて

余は本書を刊行するにあたつて、理想的の教授細目(我が校の)を編制し、之を卷末に加へる考であつた。ところがこと豫期に反し、ここに至らなかつたのは、窃かに遺憾とするところである。故にこゝにはその骨格を叙して、完成を他日に期することとしよう。

教授細目には二種あるやうに思はれる。一はたゞ教材を配當したもの、一は一定の方針によつて、教材を配當したものである。教科書のない綴り方などは、この二傾向が殊に顯著である。苟しくもその校の教授細

目といつて他に示すものならば、方針の確立したものでありたいとは、余の常に希望するところである。

綴り方教授細目中にあげられる材料は、まづ自作の參考文題・指導の材料等である。これ等の材料を選定するには、家庭年中行事・學校年中行事・社會年中行事・四季の自然界・學習事項などからとるべきである。このうち指導材料として適するものは、各兒童が殆ど同一經驗を有する事項、即ち年中行事中の儀式に關する類、お正月・氏神祭禮等、四季の自然界では學校の花壇・雪の朝などの類、及び學習事項は殊に適當である。

材料

形式方面に關する指導材料は、これ等の材料として、教師が殊に綴つたもの、又は讀本の文章等である。自作の材料は各兒の經驗を異にする類のもの、理科の實驗・面白い史談・私の家・忘れられぬ事等である。故に自作の參考題は包括的でなければならぬ。書簡文の材料中、豫定の出來るもの、即ち氏神祭禮に人を招く文試驗期日を問合す文(尋六)・遠足に誘ふ文・新年狀等は、之を教授細目中にかゝげ、火事見舞・病氣見舞・負傷したる友に・弔狀等は、その適材を得た場合に課するのである。

材料の割合

次にこれら材料の割合をいかに定むべきかといふに、指導事項の輕重によつて、(さきに尋一より尋六までにあげたるもの)自ら指導・自作の割合は定まり、適材(主として學習事項)の多少によつて、各學年に文體の割合が定まるべきである。余はすべてその校兒童の實際生活に立脚し、適材の多少によつて、教材の割合は定むべきものであると思ふ。故に從來行はれた獨斷的の文體の割合によつて文題の數を定めたやうな教授細目は、あだかも六歳から十四歳までに、一號から八號までの標準衣服を制定して、之を着せようとするのと一般で、眞に子を思ふ親には忍び難いことである。ことにその標準衣服と見るべき獨斷的文體の割合について、試みに之を制定した當時の事情を思ひおこせば、寒心にたえぬ。決して叙事四・記事三・說明二・書簡一などいふ得要領な形にして、人に示されるやうなものではない。人間は得要領を好むあまり、虛僞の事でも鍔目をあはせて、一時をごまかさうとする淋しい了簡がある。余は徒らに世を嘲罵するのではない。余の僞なき告白である。

材料の排列

材料の排列はまづ季節の關係上動かし難いものをその位置に配當し、自作材料の理科實驗・忘れられぬ事などいふ類の、一二週前後しても差支なき材料の間に、隨意選題といふ空欄に等しいものを、一學期に二題或は三題を挿んで、偶發の適材をさしこむ餘地をとつておくがよい。從來の教授細目は、この安全瓣がないために、運用の圓滑を缺いたことはどれほどだかしれぬ。

文例

自作の材料に文例の要はないが、指導材料には構想・發表兩方面ともに文例をかゝげておくのが至當である。文題の下には、自作の略として(自)、構想の指導の略として(想)、發表の指導の略として(形)など記し、連接・改作・範文・文段・題作等の方法に關したことをも記入しておくのがよい。

第十二章　餘　錄

綴り方教授の研究　（一）

綴り方教授研究の最捷徑

綴り方教授研究の最捷徑は、自ら文を書くといふことである。自ら書いてみれば、その苦心も、愉快も、成功も、失敗も、悉く味へることが出來て、教授の秘訣は自然に會得せられる。世には作文法や教授法の書物を渉獵して、綴り方教授の研究を企てるものがあるが、それはたゞ教授の方針や文を綴る手續が明かになる位なもので、眞の研究は出來るものではない。かの急がば廻れといふ諺は、綴り方教授研究上に特に至言であるとおもふ。

日一題

さて文を書くには、何を題とすべきか。吾人が綴り方教授研究のためにする文は、すべて實感を書かなければならぬ。事實や實感をそのまゝに飾らず、僞らず書いた文は、必ず權威がある。動かし難い點がある。文を綴るには、何人もこゝよりはいらなければならぬ。

加藤千幹氏は初等教育研究會員中の能文家である。氏が靜岡にゐられた頃、日一題を課業として、實感を書くことにつとめられたといふ。余はその草稿を親しく見て、氏が今日の能文、故なきにあらざる事をさとつた。しかし日一題の實行はよほどの決心がなくては行はれることではない。週一題か、月一題位ならば、さして苦勞ではあるまいとおもふ。週一題としても、一年には五十幾題、月三題としても三十六題は作られる譯である。若し眞面目に五十題或は三十六題綴つたとしたら、それだけでも文は大に進歩する。まして二三年之を繼續したら、文が一つの道樂になつて、十日も筆をとらぬと、何物かの鬱積を感ずるやうになる。その間に作文法をよめば、一々思ひ當るふしがあつて、反省もし、工夫もするやうになる。こゝに至つて、はじめて活きたる綴り方教授が行はれ、研究もその緒につくわけである。

文を娯樂の具としてはいかに

學校職員に俳人が多いと、俳句會が出來る。謠曲を好む者が多いと、謠曲會が出來る。酒好のところには酒仙會、菓子好のところには煎茶會が出來る。その好むところをたのしみ、類をもつてあつまるのは人の性である。然るにいかなれば文章ばかりは娯樂の具に供せられないのであらうか。文例は國語研究部に作つてもらつて、之に統一しようなどいふ議が折々起るやうであるが、それは各自が文を綴つて後はじめて效のあるもので、たゞその文例に盲從するのであつたら、到底功罪相償はないことおもふ。もし午食後の休憩中に、即感・即興を文にして、互に廻讀するか、或は朗讀したら、こゝに必ず意外の面白味が存することおもふ。

一人一題

雜誌、教育研究に一人一題といふ欄がある。余は常に即感・即興を書くことにしてゐるが、月に一度であるけれども、之を樂しみにしてゐる。思想・感情には大きなものもあれば、小さいものもある。又ある思想をとらへて、之に想像を加ふるものもあれば、ある思想の急所をとらへて、言外に多くの餘意をきかせようとするものもある。文には一人一題樣のものや、やゝ長篇や、さらに長篇や、乃至章節をわかつほどのものもある。かゝる小中大の思想を書くといふことは、直ちに綴り方教授の研究である。

左に余が一人一題欄にのせた文、文章修養のために綴つて見た文、及び所感意見等を書いた文數篇をかゞげて參考に供しよう。これが文の模範といふのではないが、もし之をしも文といひ得るならば、文は易々た

るものである。その小説様の文は（余は小説を書く柄ではないが、こんな氣分になつたこともあつた。）たゞ余が見地かへて書いたまでで、悉く余の事實である。秋郊の山高帽は余である。北條早雲でも、油壺から引きあげたやうな男でも、皆それ〴〵に固有名詞がある。讀者諸氏もし余の不遜をとがめず、もし之が動機となつて、筆に親しまるゝやうなことがあれば、今日までこの綴り方教授困難の聲は、蓋し雲散霧消することであらう。

◎骸骨

毎週火曜日に我が校で橋田學士の生理の講義がある。この頃骨格の話になつて、余は我が校所藏の骸骨子と屢々相見るの機會を得た。

骸骨子は見れば見るほど風雅な顏をしてゐる。どこかに笑をたたへてゐる。その笑ひ方が婆婆のとは少々ちがふ。冷な様な中に嘲の氣味がある。しかしその嘲は他人に對してではなくて、自己の過去を笑つてゐるやうである。罪のない冷笑とは蓋し之であらう。

人間も五官といふ慾のもと、肉や血といふ罪のすみかを去れば、かうも澄したものになれるであらうか。

◎別れ

余は骸骨子に親しむと共に、半月か一月、かの境遇になつて見たいとおもふ。こんなことを書いてしまつた時、「緋威たて羽」（蝶）が骸骨の傍に眠つてゐるのを不圖發見した。

たそがれ時に門の戸があいた。ポチが吠えた。しばらくして緣側から大きな男が案内もなく上つて來た。見れば何壽田である。「先生、永々お世話になりました。私明後日歸ります。」といつて座した。「革命軍に投ずるのか。」といふと、「それは分りません。本國の今日は時勢が英雄をつくる時です。」といつて笑つた。折しも客が來た。彼は次の一室に下つて、家内のものをあつめて、革命軍の形勢をさかんに說いてゐた。「をばさんそれでは歸つて來ます。再來はわかりません。御きげんよく。」とあいさつしてゐるので、僕も「いよ〳〵往くのか。死ぬなよ。」といふと、「先生、死ぬ覺悟でなければ事は出來ません。」といつた。彼は志士をもつて任じ、これから國難におもむくのである。我ははじめてかゝる機會に遭遇した。彼庭上に佇立して、「先生の御厚恩を感謝します。」といつた。我は彼の衷情に泣いた。彼の影は既に暗に見えなくなつた。彼は十九歳で渡來して、今年二十四歳、その中の三年は余の膝下にゐた愛兒である。

◎人格の影

隣り合せて同時に他に引越した家があつた。見まはりに來た家主が、一人は「人は皆かうありたいものだ。たつ島あとを濁すなだ。」としきりに感心してゐた。一人は「奥様はお化粧は凝つたものだが、この遺りつぱなしはまるで野分のあとだ。人は見かけによらない。」とこぼしてゐた。

一軒は掃除してたち、一軒は後をかまはないでたつたといふに對して、兩家主の感歎と誹謗の聲である。赤穗の城を幕府の使者に引渡した渡し振に、大石良雄はどれほどその人格をあげたかしれぬ。事は一事が萬事で、皆人格の影である。

笑の神

こどもはよく笑ふ。これに接するものもつい笑はせられる。こどもは現社會を笑化すべき使命をおびてゐるのか、はたおのれに接するものが笑ふので、これに酬ゆるに笑をもつてするのか。

昨日の雨は夜の間にあとなく晴れて、朝日はうら〳〵とさし出た。今日はわが校の遠足である。

余が學校についたのが七時過、身邊に蝟集して、あいさつをする子の顏から、笑がしたゝりさうである。「先生、おはやう。」といつては笑ふ。「先生、いゝお天氣になりましたのね。」といつては笑ふ。「先生がお辨當もつていらつしやる。」といつては笑ふ。「先生が髯をひねつた。」といつては笑ふ。「先生、今日はおつかさんも一しよによ。」といつては笑ふ。あゝ多幸なるわが兒童よ。汝はそれほどまで世の事がうれしいのかと、我もつい笑の中につりこまれた。すると「先生が笑つた。」といつてはまた笑ふ。

我は今日程無邪氣を感じたことはない。それは笑ふ子に身仕度させて、校門をつれだした時、我はこのをさなき笑隊の司令官であると思つたことであつた。昨日の雨で塵は少しもたゝぬが、風は強い。自分の赤總の帽子がふきとばされるたびに、拍手して彼は笑つてゐる。

錦町から逞しい馬を馳せて、わが隊をつききらうとした頰髯の將校も、わが隊をながし目に見て、いひしらぬ笑を浴せて去つた。

いかに人込の中でも、矢の飛ぶやうにきつて通らねばおかぬ魚河岸の哥兒六人、一臺の車を押して、全速力でわが隊につつかかつた。すると六人いひあはしたやうに、車の惰性を力の限りとゞめて、汗を拭ひ拭ひながめてゐた。こどもはこれを見て笑つた。哥兒も笑ふ兒を見て笑つて居た。

神田川をこした時、横の下を下りゆく傳馬船のおかみさんが、こぐ棹を水にまかせて、仰向いてゐた。こどもがこれを見て笑へば、おかみさんもお鐵漿(はぐろ)つけた齒を見せて笑ふ。

交番の前を行けば、おまはりさんが笑ふ。電車に添うて行けば、車掌が愛嬌をふりまいて去る。

日比谷公園についた。つゝぢはやゝおくれたが、藤はいまがまさかりである。總の下つた藤棚の下で、解散させたが、兒童は池のまはりをかけまはつて笑つてゐる。散つた花をあつめて投げ合つては笑つてゐる。鶴の噴水を見ては笑ひ、あひるのあるきぶりを見ては笑ふ。

このあたりにつどふ學生・兵士・ひさしがみ・新聞の賣子・若夫婦・田舍の老人、悉くわが兒童をながめて笑つてゐる。あゝ兒童は笑の神か。この神の行きすぎるところ、有情・無情悉く笑化せられる。この世から兒童をのぞき去つたら、いかに殺風景になつてしまふであらう。

秋郊

小春日和の日曜を、うちに煤ぶつて居るのもをしいと家を出た。出るには出たが、別に行くべき目的はない。目的はないが、脚は忠實にその任務を盡して、我を江戸川の大曲まではこんだ。

春ならば「花や今宵のあるじ。」など洒落てこのあたりにぶらついても、一日位は、雜作もなく暮れる。ところが、暮秋の江戸川ぶちは、何もない。主なき貸船が、數隻さびしげに櫻の根にからみついてゐるばかりだ。

脚はなほ江戸川に沿つて進んでゐる。大曲からは、もう十四五町も來たであらう。廣い〳〵道をはやよほ

ど來てゐた。つきあたりには護國寺の門が見える。

散歩をするに、なまじい目的などきめると、それに拘束せられて、自由がきかなくなる。心のまゝに、氣の向く方に脚を向けて、いそがずせかず、かうして逍遙してゐる氣分は、この世が殆ど我がものかとの勘違もおこる。

門につきあたつては、脚の方向をかへねばならぬ。もとより門からはいつて賽錢を上げるほどの信心はない。そこから左に折れて、落葉の多い小路をわけていつた。僕は櫟の落葉のかわいたのを、踏んであるくことがすきだ。「ガサ／＼」と音がする。實にいやみのない音だ。この音をきくと、故郷の櫟林がおもひ出される。子供の頃、櫟實(どんぐり)をゐぐつて、笛をこしらへたことも浮んで來る。

椋の並木のところに出た。その並木の間に、茶店が數軒ならんで、小綺麗な姉さんが客をよんでゐる。芋の田樂屋がある。薄の穗でつくつたふくろう(鴟梟)が賣つてある。こゝは雜司谷の鬼子母神である。

椋の並木が馬鹿に氣にいつた。僕の五抱もあるほどの椋が、一町ばかりたちならんでゐる。僕は例の脚のむくにまかせて、鬼子母神の方へいくと、そこに女繪師がゐて、しきりに寫生してゐる。僕も子供の仲間入してすこしのぞいて見たが、繪はきはめてまづい。それでも時々首を傾(かし)げて、繪師の型をやるのが殊勝でならぬ。

そこの茶屋にまた氣にいつた一軒があつた。氣がむけばどこでもはいるといふのが我が主義であるから、ずつと通つた。

「いらつしやい。」

四圍の境遇は異なもの、小娘の金切聲がこゝでは少しも俗氣を帶びて居ない。茶を入れて來た娘が、

「たいそう御熱心で。」

といふから、

「うん。」

と不得要領な返事をした。僕は別に好んでこの返事をしたわけではないが「僕が何に熱心だか。」を問返すのがうるさいからだ。

「あら、すましていらつしやる。」

といつて笑ひながら出ていつた。後できけば、女繪師の寫生を見てゐたのを、冷かしたのださうな。油斷のならぬはじけつ子ではあるわい。

植込の向ふの座敷に、十人許どやどやとはいつて來た。大黑帽がある。鳥打帽がある。河童を油壺から引きあげたやうな頭をして、中折をのせてをるのもある。中に一人目立つのは、小兵に不似合な程高い山高帽子をかぶつてゐるのがあつた。そしてこれが一番老年である。

「おちよぼ壯健(たつしや)か。」

「あら、口のわるい。お下女(ちよぼ)なんてこれでもこちらのお嬢さんですよ。」

「ねいや。」

「あたし、女中ぢやないことよ。」

到底大黑帽や鳥打帽の敵ぢやない。

「では、御飯が十一人様に、二十二人前。」
「十一人様丈は餘分だ。人ぎゝがわりいや。」
「燒鳥十五人前、卵燒十一人前、芋田樂。」
「よせよ。馬鹿にはしやいでゐる。」
「あたし、女中ですもの。」
「何んでもよい。小僧どもが死にさうだから早く。大いそぎで。」
これは山高のあいさつであつた。
「先生、先生の符牒を知つてゐますか。」
これが飯をまつ間の話頭の第一であつた。先生とよばれた山高が、
「知らいで。」
「いつて御覽なさい。」
「馬鹿いへ、君いつて見たまへ。」
一隅から、「駝鳥、駝鳥」といつた。それがために、一座笑ひ崩れた。
「虻つて、誰か知つてゐますか。」
「知らいで。」
山高は、「知らいで」の一點張だけれども、この「知らいで」にしつかり重みがある。石地藏に投げた小石が己が彈力ではねかへされるやうに聞える。

僕はこの様を見て、これが舊師弟の一行だとさとつた。やがて、料理が來て、食事がはじまつた。
「先生の分には誰も手をつけるな。」
とは、大黑帽が當會幹事としての申條で、同時にそれが開會の辭であつた。我はうるはしい會を見たことも少くないが、これほど隔意のない、清らかな會は今はじめてだ。
書生の一人が、小娘の給仕をもどかしがつて、櫃のそばによつた時
「北條早雲、一ぱいたのむ。」
と先生がいつたので、一座は笑ひ出した。いかにもその書生の頭は、早雲の肖像そつくりである。早雲は
「おそれいりますね。先生もすばらしいものだ。」
と稱贊した。飯がはやつきたらしい。小娘が母屋の方をむいて、
「きいちやん、もう十一人前、御飯を。」
僕も晝飯をすまして、椽側の柱を脊に薄のおくる風にふかれてゐると、向ふの室で、又話がはじまつた。
「城の馬場の雨中隊列運動はひどいですね。」
「校長の命令ならしかたがない。」
「先生は全く同情がない。」
「勿論さ。命がをしいから。君等をうんと濡らさなければ、僕の首がとんでしまふは。」
「眞相はそんなものですかね。」
と幹事の大黑帽が聞く。

「眞相といへば、僕が諭示退學になつた時は、悔しかつたよ。牛肉屋の女中と關係があるといふ罪狀なんだもの。」

河童の中折がかういつた。

「なかつたのかい。」

「あるもんですか。先生までまだあんなことをいつてゐるから仕樣がない。」

怨むでもなく、辯解するでもない、この一座の懷舊談は、實にゆかしい。山高帽が

「落つれば同じ谷川で、アップアップの仲間だ。先生といふ商賣がいやさに、かうしてゐるのさ。」

といふと、早雲が、

「下におけんぞ。」

と一座に警戒した。

我はこの一行が何となくなつかしいので、あとから巣鴨あたりをついてあるいた。何の意味もないがきがむいたからである。

秋郊の半日、人の知らぬおもしろみを得た。

耳からはいる文學

○耳からはいる文學

和歌・俳句・新體詩・小說・紀行等は目からはいる文學である。都々逸・琵琶歌・落語・講談・淨瑠璃・人情話等は耳からはいる文學である。目から入る文學はもとより尊いものに相違ないが、耳から入る文學も亦尊いものである。もしこれを教育上に利用するといふ立場からいつたら、その價値に於て決して優劣のあるべきものではない。

國民文學は國民娛樂の具として大切なものである。それと同時に國民の感情に同調の色彩を施す刷毛である。日本國民が高下を通じて、義に勇み、正を愛する樣な處、負けぎらひで、涙もろい樣な色のあるのは、一に我が國民文學によつて統一せられた感情の然らしめるところである。日本國語の中でそだち、日本國語であらはした文學を味はへたものは、日本魂をもたずには居られないのである。

目に一丁字を解し得ぬものも、我が國民的色彩を感情の上にあらはしてゐる。やゝ奇怪の感がないではないが、仔細に觀察すると、彼等は耳を以て國民文學を味はへたのである。

兩國橋のむかふの、今は表忠碑のたつてゐる近所であるとおもふ。今から十年前には、毎日午後から夜にかけて、祭文（今の浪花節）の開放的寄席があつた。開放的寄席は入るも出るも自由で、木戸錢をとらないのである。上壇に祭文を語る場所がある外は、一切土間で、それに長い床几がおいてある。一切聽かうと思ふものは、暖簾をはいつて、その床几に腰をかけて聽くのであつた。しかし傍聽料は思召で、一切五錢を投ずるものもあれば、三錢でよすものもある。非常におもしろくて氣に入れば、十錢銀貨一個を奮發するものも珍らしくはない。そこでこゝにあつまる聽衆がきはめておもしろい。丁稚もゐれば、番頭もゐる。豆腐屋の賣子がゐるかとおもへば、船人もゐる。職人體のものも居れば、仕事師もゐる。こゝもこみあふことがあると見えて『すり御用心』と筆太に書いた札までさげてある。余もこの邊に用があつて行くことがあると、他の時間を節して、一切は必ずこゝで聽いたものである。

今は世が進歩して、街頭の立食、立呑などが少くなると共に、開放的寄席の立聽する處もすくなくなつた。しかし湯屋では、今も往々文學を耳からきくことがある。「その筋の御注意により、高聲を發し、又は放歌することを堅く御斷申上候」などいふいかめしい掲示はあつても、腕に小意氣な彫り物のしてある、角刈頭の若衆は、始めの程こそ謹愼に頭を湯槽の中に浮かせてゐるが、溫みが全身に透つて來ると、所謂心身の關係で、陽氣な聲を出しはじめる。かうなつては「その筋の御注意」も寸效がない。「イヤ權兵衞、そちが親切はありがていが、旗本の威勢にひけをとつたとあつては、この長兵衞の顏が立たぬい。」と湯槽にとりついて幡隨院をきどるものがある。それかと見ると、こちらでは、「仁義忠孝の道さへたてば、もつそう飯のきりまいも百萬石にまさるぞや。おのれが心たゞ一つで、むくいは目前これを見よ。」と十段目をうなり出すものもある。これらは悉く國民文學の一節で、耳から入る文學の一種である。

佐野の城主天德寺了伯が、平家物語を琵琶法師にきいて泣いたといふ話は、武將の逸話として吾人の耳に親しんでをるではないか。耳から入る文學も、目から入る文學とその結果が同一であるといふにはきはめて適例である。同時に文學が誰にも缺くべからざるものであるといふ意も略々さとられるであらう。

余の友人に「演劇を見ないと、人間があさましくなる樣におもふ。」といふ者がある。余といふ者がある。又「小說を半年もよまないと、何となく淋しい人になる樣におもふ。」といふ者がある。余も研究とか調査とかいふことばかりに忙殺せられて、名家の小品一篇をも讀まない時には、人間の價値が下つた樣におもふ。要するに澱粉と肉とがあれば生きていくことは出來る。しかしよく生きるには野菜は勿論果物も缺くべからざるものである。吾人の生活と文學との關係は營養と果物との關係である。

このことは貴賤貧富によつて差別のあるものではない。いろ〳〵の事情の爲に、果物を取ることの出來ぬものはあらう。しかし不用なのではない。余がまだ十ばかりの頃は、余の鄕里八十戸ばかりの寒村にも、年に三四回は浮れ節（今の浪花節）語・祭文讀がきたものであつた。それが來ると、一夜或は二夜は村內の者が醵金して、ある家に於て岩見重太郎・宮本武藏・天一坊實記などを語らせて聞くのであつた。又村の篤志家は春秋二季に、近鄕の素人義太夫を請じて、村內の者に之をきかせたものであつた。それが此の頃では全くそのあとを絕つて、村內はきはめて無趣味のものとなつたと、この頃の通信に見えてをる。實に耳からはいる文學は、次第に田舍に絕えていくのではあるまいかとおもふ。

「酒は富者には贅澤品であるけれども、下等の貧民・勞働者には必需品である。」と誰かの著書で見た。富者は酒以外に幾多の娛樂の具を有してをるが、貧者は一盃の酒が唯一の慰藉であるとの意であらう。まことに耳から入る文學の衰頽していくのは、下等社會又は田舍の寒村から慰樂の唯一の具を奪ふやうなものである。慰樂の具を奪ふのはまだ忍ぶことが出來るが、無敎育者がこれによつて性情を陶冶される唯一の具を奪ふのは、吾人は何としても忍び難い。若し今の樣子で耳から入る文學がおとろへて行く結果を想像すると、今日の社會を幾倍か冷酷にした樣なものになつてしまふのであらう。

親が無趣味になる。子のツムジがまがつて來る。反抗精神が強くなつて來る。敎育の效果は上らなくなる。吾人はこれらを考へて、耳からはいる文學の興隆を希望してやまないのである。さて文學といへば、劣惡なものは別として、然らざるものは、國語の粹である。これを聽くといふ事は、知らず〳〵の間に國語の粹をさとるといふことになる。故に浪花節や淨瑠璃を好んで聽く人の談話は、概して流暢である。多くは巧妙で

ある。要するに耳から國語教授をうけてをるのである。小學校の國語教授を有效ならしめるといふ點より耳から文學をつぎこむ必要があるとおもふ。

吾人は教師として身にあまるほどの荷を脊負てをるのである。いかに耳の文學を鼓吹するといつても、自ら淨瑠璃を語ることも出來ねば、浪花節の修業をする譯にもいかぬ。とても特殊の修養を要する藝術をかりて、耳の文學を鼓吹することは不可能である。しかしこゝに一の手段がある。吾人は日日の教授に於て、話術は是非に研究しなければなるまい。小學教師は三寸の舌を以て、七十内外の兒童を繰るのであるから、話術に於ては一般の人よりはすぐれてをるべきである。この一歩すぐれてゐるところを以て、人を指導するに利用すべきである。機會ある毎に神代話でも、軍記物でも、復讐美談でも、高僧傳・歌物語・比喩談でも、はなして聞かせるがよい。吾人には既にかびが生えてゐるとおもふ樣な話でも、文學に遠ざかつてゐる人々には、珍らしいのである。教師にとつてはさして苦勞なことでもあるまいから、耳の文學復興をこの點からはじめたがよいとおもふ。たゞ注意すべきは、昨今初等教育界に活動の中堅となつてをる慶應前後にうまれた教育者は、多く理で育つた人である。すべての結論は理でくゝらねばならぬと感ずる人である。もし神代話の結論を人種問題にもちこんで、その博識を衒つたり、軍記物語の終を武士道論に結ぶやうな事があれば、教育者自身の智識慾は滿足が出來ようが、聽き手にはきはめて殺風景になるのである。

この頃は寺院の説教が勢力がなくなつて來た。こゝにまゐつて隨喜の涙をそゝぐものは、主に先のみじかい人ときまつてゐる。これは信仰の動搖から來た結果であるから、止を得ないが、耳の文學・國語の發達といふ上からは、一の有力なる機關を破棄せられた感がする。この頽勢を挽回する事は、一朝一夕にはむづかしいから、この際に初等教育者はまさに一生面を開くべきである。宗教が改善せられて隆盛に赴くのは願はしいことであるが、これと共に教育者の國民文學に關する談話もます〳〵發展すべきである。德川時代の末心學道話の盛に行はれた頃、儒道の拮掘と佛教の陳腐とにあきてゐた民衆は、多くこれに奔つて聽聞したものらしい。しかし今はその面影が僅かに一地方に殘つてゐる。かゝる頽勢は宗敵のあつたのも一つの理由であらうし、甘い話も苦い藥を飲ませる方便であつたことも有力なる理由であらう。なほそれよりも大なる理由は、保護のなかつたといふことであらう。吾人がこゝに提供する國民文學に關する談話は、その二故障のないばかりではなく、吾人が學校教育にたづさはるといふ點より、少なからぬ保護をうけるのである。

なほ青年團體などある地方では、國民文學を材料とした談話會を奬勵するがよい。談話を讀み方・綴り方と對立させるがよい。また談話にかへるのに朗讀をさせることもよい。或は扇の的或は宇治川の先陣或は安宅の關或は菅原傳授手習鑑或は一の谷嫩軍記或は狂言或は一休諸國物語或は金色夜叉或は書生氣質或は我輩は猫である等苟しくも我國文學で有名なものは、何でも讀ませるがよい。(風教に害なきもの)かくて青年の耳に文學がしたしめば、その趣味の高まるはいふまでもなく、讀書の習慣もおのづからついて、閑居不善は少くなつて來よう。かくして校下に國語を味へる風習がおこつて來れば、學校の國語教授もためにその影響を被むらずにはゐられぬ。

余はよく次の樣な質問をうけて、

「私の地方では一向讀書力がつきませぬ。綴り方がどうしても發達しませぬ。その理由が那邊にあるでせうか。」

と。余は之をきくたびに、教授方法の缺點に存するとのみ答へて來た。今となつて考へると、却つて社會の事情が教授方法以上の原因をなしてをることとおもふ。諺に「門前の小僧(丁稚)習はぬ經をよむ。」といふ。この一語が國語教授の效果と社會の事情との關係を、明かにいひあらはしてをる。故に余は小學校の國語教授を有效ならしむるといふ點よりも、亦耳の文學を大に隆盛ならしめたいとおもふ。

思想界は自由

綴り方教授の研究　(二)

綴り方教授研究の第一歩は、教授者自身がその事に趣味を持つといふことである。次に教師が工夫に工夫をこらして教授して、その結果兒童にどんな印象を與へてゐるかを調べて見るのが研究の第二歩である。余はこのことに氣がついてから、學年末に一回必ず綴り方に對する意見をかゝせてゐるが、隨分おそれいらなければならぬ樣な意見がある。兒童でも十一二になると、油斷はならぬ。教師が叱つたり睨んだりして、教場にひきいれると、皆從順羊のやうにしてゐるが、その思想界は自由なものである。

某兒が綴り方の教授を評す

昨年尋六を卒業した某兒が、「尋常二年の時は書取ばかりさせられて、綴り方は實につまらないものと思つた。尋三四五は〇〇先生に擔當されたが、その先生は飾つた文が大層おすきであるから、文を形容することにどれほど苦勞したかしれぬ。その時の教生の先生は〇〇先生以上の形容文のすきな方で、學年末の感といふ題の出た時、うんと飾つて書いた。必ず「美」か「美上」だらうと待設けてゐると、評點が「良下」であつた。僕はしみ〴〵綴り方が厭になつた。尋六になつて蘆田先生に受持つてもらふことになつたが、この先生は「文はかざつてはいけない。有りのまゝに書け。」といつでもおつしやる。形容文から飾らない文にうつるのは容易なやうであるが、中々さうでない。つまり尋六の始めは綴り方の流義がかはつたので一向面白く思はなかつた。この頃(第三學期の終)になつていくらかおもしろくなつた。」と書いた。これが女にして見たいやうなやさしい、從順な兒の言である。その意見が實に條理明白なので、余は驚きもし、敬服もした。同時に兒童は眞に尊敬すべきものだとの念を數段たかめた。

負うた兒に教へらる

昔は「負うた兒に教へられて淺瀨を渡る。」といふ諺を、愚かしいものの上に用ひたが、今は時勢がかはつて、教師が兒童に學ばなければならぬ事が多い。教授の研究を、教師の計畫と兒童の器械的成績と教師の所感とによつて進めるのは、魂の入らぬ佛を作るやうなものである。兒童の赤裸々な告白を加味して始めて眞の研究になるのかとおもふ。

つまりきらひだ

○

僕は一年から四年までは、綴り方がすきでもきらひでもなかつたが、四年になつてから「美」をとつたことがないので、大きらひになつてた。五年になると急にできがよくなつて、たいがいは「美」であつたので、大きらひといふほどではなくなつたが、一たい綴り方はきらひだ。それゆゑ僕は綴り方のある日はきらふ。綴り方の時間はなほきらひだ。(尋五)

愉快でたまらない

余の擔任學級にも、かゝる兒童がある。どうかしてと趣味の喚起をつとめてゐるが、いまだその琴線にふれぬ。

○

僕は綴り方が好きになつた。なぜすきになつたかは知らないけれども、いつでも書くたびに愉快でたま

らない。したがつて文もよいのが出來るやうに思ふ。僕はある時、文ばかり書いて暮さうかと思つたこともあるのだ。たぶんこれ等のことが文が好きになつた動機であらう。（尋五）

○

僕は去年七面山にいつたことがある。家へかへつてから何んだか文が書きたくなつた。さつそく文を綴ると、自分からうまく出來たと思つた。それから僕はかんがへた、自分から書きたくなつた文はうまく綴れるが、人に題を出されて書いたのはうまく出來ない。だから僕のすきな題は皆自分で考へたのである。僕はこれから文題はなるべく自分で考へたものを書かうと思ふ。（尋五）

隨意選題がすきだ

○

僕は學科の中で綴り方が一番すきだ。それは僕が生れつきすきなのではなく、二年の終に犬の恩返し・木口小平など僕の書きよい題がたくさん出たので、續けて二三度「美上」を取つた。それで僕は綴り方が大々すきになつたのである。

美上をとつてからすきになつた

僕は今までによい言葉がなくてこまつた事が何度もあつたから、これからはえらい人とか、文のうまい人とかの書いた本を讀み、よい言葉のあつた時は、すぐこれを手帳にしるす樣にしようと思ふ。（尋五）

言葉を豐富にしよう

○

私は綴り方が何よりもきらひでありましたが、高木さんの四等の文をなほしてから、大層すきになりました。あの文をなほしてから、どうしたものか自分で上手になつたやうな氣がいたします。それで私は文を上手にするには、わるい文を直すのがよいと思ひました。をり〳〵二年の時の文や三年の時の文をなほして、綴り方をよくしようと思ひます。（尋五）

高木さんの四等をなほしてから上手になつたと思ふ

○

四年の時の冬休の事であつた。僕は或日勉强ををへてから、本所の親類の家へ遊びにいつた。行つたら叔母さんがいらつしやらないので、色々な雜誌を讀んでゐたが、ふと目についたのが冒險世界であつた中を見ると、口繪に汽車がてつきやうの上を通つてゐて、其の窓から一人の紳士が賊のために投りだされた所の繪であつた。そして其の上の方に、「あはれ、無殘や下は千尋の谷底。」と書いてあつた。その横には、讀者諸君は五十八頁を見よと書いてある。僕はすぐ五十八頁を開いて見た。たいそう面白かつた。其の後も時々冒險世界を見て、しらず〳〵綴り方がすきになつた。（尋五）

冒險世界をよんでからうまくなつた

○

今月の九日の事であつた。かへり道の電車の中で、蘆田先生が

「君は此の頃文が非常に上達しましたね。」

とおつしやつた。僕はこの言葉で思ひだしたが、實に三四年頃はまづかつたものだ。いつでも「可上」か「可」ばかりとつて喜んでゐた。たまに「良」でもとると、僕は鬼の首でも取つたやうに喜んだ。しかし五年頃になると、「良」では滿足が出來なくなり、「美」がほしくなりだした。そのうちに六年の始めに、「九日の大火」（吉原）で「美」を取り、それから「蜀山人」でまた「美」を取つた。さうすると念に綴り方が好きになり、一生懸命に書くやうになつた。それからは益々綴り方を面白く思ふやうになつたのである。

評點がよくなつてから好きになつた

八犬傳をよんでうまくなつた

僕が綴り方を面白いと思ひだしたのは、文がたつた二つのためである。（尋六）

○

僕は五年の時八犬傳を讀んで、しみ〴〵馬琴はえらいと思つた。しかしなあに僕にだつてこれ位はできるさといふ考が頭をもちあげて來た。そこでよし書いてみようと、三帖綴の半紙帳に「姫百合」といふ題で、毎日一生懸命に書いた。文は馬琴の七五調をまねて、口調よく書いた。そのすぢは

「戰國の世、奥州伊達政宗の部將、山名新九郎金長といふ者が政宗に反して、青葉城下で政宗と戰ひ、遂に破れて殘兵百餘と蝦夷に走り、兵を集めて再び攻め來る。而して秋田城之介を攻め、由利に根據を固めて、奥羽諸雄と戰ふ。轉戰百餘回一度も屈せず、勢いよ〴〵盛なる時、政宗の方に三人の壯士出づ。その名、姫吉・百之進・合太郎といふ。世人その頭字を讀んで、「姫百合」の三士といふ。この三士政宗のために由利におもむき、金長に捕へられたが、牢を破つて深夜本丸に忍びこんで、金長を殺さうとした。しかし守備が嚴重なために、果すことが出來なかつた。三士のこの壯擧は失敗に終つたが不圖したことから城の繪圖を手に入れて歸つた。これを政宗に獻じて、さらに征討の大軍をおこし、一時に攻めよせて目的を果す。」

といふのである。實に簡單なものであつた。しかし僕は八犬傳に劣らないものと思つてゐた。今から考へてみると、僕は到底馬琴にはかなはない。

この間吉野君とともに茗荷谷の馬琴の墓にまゐつたが、其の時はことにこの感がふかかつた。（尋六）

兒童の告白は尊いものではないか。適當な少年書類をよませなければならぬといふことも知らせ、評點もあまりにからいのは、文をすゝめる道でないといふことも教へてくれる。尋五になれば文の批正が效果をあらはすことも示せば、隨意選題の大切なことも知らせる。兒童の告白に耳を傾くる教師にして、はじめて綴り方の成績をあげることができよう。

綴り方教授の研究　（三）

いかなる兒童が綴り方に上達するかは、教授研究上大切な問題である。天才肌のものと、低能の傾あるものは別として、一般には不幸或は悲慘な運命に接したもの、即ち生活に劇變のあつたものの文がのびるやうに思はれる。もとより家庭學校に於て思想發表の自由を與へられてゐる者に限る。同じ不幸にあつても意地のわるい繼母の許におかれては、文の進歩には大なる影響はない。

○

私の愛藏して居るものは紙挾である。今はぼろ〴〵になつて黃色いボール紙がはだを出して居る。あけて見ると、一方に小さく「吉野八重子」及び「吉野八重子馬鹿」と書いてある。亡くなつた妹の形見だ。

此の紙挾はお母さんが本鄕から買つていらつした。勿論こんなにきたなくはなつてゐなかつた。其の時分、僕には一つの紙挾があつたので、妹の載くのを空しく指をくはへて見てゐなければならなかつた。しかしどうも殘念だ。僕のがきたなくて、妹のが綺麗だなんて、そんな法があるもんかと勝手な理窟をつけて、何んとかして僕のものにしてやらうと考へた。よしおどかしてやれと、妹の後に忍びよつた。

そしてそばの硯の墨をたつぷり筆に含ませて妹の大切にしてゐる折紙箱を引張りだし、「八重ちやん、さつきの紙挾を僕におくれ。……くれないつ。……くれなきや、さあどうだ／＼。」とばかり、筆を取出し折紙の中にいれてかきまはさんとする勢を見せた。然し八重ちやんの大夕立のために、此の示威運動はまんまと失敗した。お母さんが「これいけませんね。紙挾がほしけりや、買つてあげますものを。そんな事をして。」ととう／＼お目玉で事はすんだが、すまないのは僕の胸だ。

「なんだ八重子の泣蟲奴が。」と其の晩そつと紙挾に「吉野八重子馬鹿」と書いて置いた。ところが翌朝妹が僕に「いゝものあげませう。」といつて、紙挾をくれた。其の日の夕飯に、僕はとう／＼いたづら書を白狀しなければゐられなかつた。

これが今も僕の持つてゐる紙挾の歴史である。吉野八重子馬鹿の七字はあざやかに殘つてゐるが、書かれたぬしはもうゐない。（尋六）

これはたゞ一例であるが、この兒がなき妹のために書いた名文は二篇や三篇ではない。余の教へ子の中には父にわかれたもの、火災にあつたもの、病になやんだものなどがあるが、皆自由な筆をもつてゐる。

續き物の繪と文案

尋常二學年の第二學期に用ふべき續き物の繪畫を工夫し、左の文案によつて第三學期に取扱つてみた。題して「太郎さんとぽち」といふ。

一

こすもすやさいねりやのうつくしう咲いてゐるお庭に、太郎さんがぽちにばんをやつてゐます。
太郎さんはぽちをたいそうかはいがります。ぽちも太郎さんによくなれてゐます。
太郎さんがお菓子をいただくと、いつもぽちに分けてやります。
するとぽちはいつでもちんちんをします。
ぽちは太郎さんがかはいがつてくださるのを、うれしく思つてゐるでせう。

二

あるあさのら犬が太郎さんの靴をくはへて逃げていきました。
ぽちはこれを見て、「こりや大へんだ。坊ちやんがどんなにおこまりになるか知れない。」と思つておつかけました。のら犬は一生懸命に逃げていきます。ぽちは逃がしてなるものか。」とおつかけました。
ぽちは追ひつきました。飛びかゝつて噛みつきました。のら犬は驚いて、靴をはなしました。
ちやうどそこを通りかゝつた太郎さんの友だちが、「あれはぽち

ではないか。喰合つてゐるよ。おや、靴をくはへて歸つていく。太郎さんのだらう。」と話しながら學校へいきました。

三

太郎さんは學校にいくしたくをして、げんくわんに出ました。靴をはかうとすると片足ありません。「どうしたのだらう。」とみんなふしぎに思つてゐました。

そこへぽちが靴をくはへて歸つて來ました。そしてながらでもしたやうに、尾を振つてゐました。

太郎さんはこれを見て、たいそう怒つて、「ぽち、ふざけるな。學校がおくれるは。」といひました。そして靴をはいてかけていきました。

ぽちは太郎さんに叱られて、どんなになさけなく思つたでせう。

四

ぽちは太郎さんを見送つて、なき〳〵自分の小屋に歸りました。そして「いくら叱られても惡いことをしたのではないから。」と思つて、なほ泣いてゐました。

太郎さんが急いで學校にいきますと、途中で二人のお友だちに

あひました。すると一人が「君、君のうちのぽちはえらいね。」といひました。太郎さんは何のことだか少しもわかりません。又一人が「のら犬がくはへていく靴をとりかへして、さつき持つて歸つたよ。君のではなかつたか。」といひました。

太郎さんははじめてぽちのしんせつを知つて驚きました。そして「僕はぽちにすまないことをした。」といくども〳〵いつてゐました。

五

太郎さんは學校にいつて、一日「すまないことをした。」と思つてゐました。

學校がひけると、ぽちのことが心配ですから、いそいで歸りました。家の近くに來ると、ぽちがむかへに來てゐました。太郎さんを見るとかけて來て、飛びつきました。太郎さんはかはいくてたまりません。

太郎さんはお父さんやお母さんに御挨拶をして、それから、犬小屋にいきました。そしてぽちを抱いて、「ぽちやすまなかつたね。親切なおまへを叱つたりして。」といふと、ぽちもわかつたのかなつかしさうに太郎さんをなめました。

綴り方教授 終

第十二章 餘錄

○知と信

◎知るは易く、信ずるは難い。

◎讀書萬卷、而も一の信を得ない者がある。世に之を腐儒といふ。

◎痩せ馬が重荷を背負つたやうなものだ。

◎信はいかにして之を得るか。道は多岐であるが、實行が最捷徑だ。

◎吾人の日々にたつ教壇は、信を得るの道場だ。

◎信を得る道場に立つて、腐儒のあとを追ふ。思はざるの甚だしきかな。

昭和十四年六月十五日印刷
昭和十四年六月三十日發行

綴り方教授
定價金壹圓
（送料十錢）

著作者　芦田惠之助
發行者　東京市神田區鍛冶町三丁目六番地　芦田伸三
印刷者　東京市神田區錦町三丁目二番地　菅生定祥
印刷所　東京市神田區錦町三丁目二番地　協榮印刷所

不許複製

發行所　東京市神田區鍛冶町三ノ六鍋町ビル内　振替口座東京一七八七二番　同志同行社

取次所　東京　林平書店　大阪　柳原書店

芦田惠之助著

（大好評）

全巻完成

小學國語讀本と教壇

我が初等教育史上に赫々たる光を輝かして生れ出た小學國語讀本は昨秋其の完成を見た、之こそ實に國家的の一大偉業である。

しかし之をして眞に偉業たらしめるものは小學校の教壇上に於ける日々の運用如何にある。此の國家非常時に於ける小學教育者の第一のつとめは此の尊い教材を基として國民精神の根本を幼い魂の中にしつかり植ゑつける事である。四十餘年の生涯中の大部を教壇上に暮した著者は國家に對する最後の御奉公として新讀本を眞に生かす工夫を過去六年間眞劍にこらした。其の成果が此の全十二卷の「小學國語讀本と教壇」である。

此の書こそ表面の文字上の解釋にのみ終止した多くの解說書と全然類を異にしてゐる。國家を小學校の國語教育によつて救はんとする烈々たる著者の魂が至る處ににじみ出た、まことの教壇の姿を如實にあらはしたものである。

長年に亘る著者の涙ぐましきまでに眞劍な體驗と國心培養の心底から冀ふ著者の眞實心が此の十二卷の教壇を通した特色である。

同志たると否とを問はず實際家が是非此の一書を座右へ具へられん事を心から御願する。

各卷の定價は卷別に明記してありますから送料加算の上御註文下さい。

定價

卷一・二	各・七〇
卷三・四	各・九〇
五・六	
卷七・八	各一・二〇
卷九	一・三〇
卷十	一・四〇
卷十一	一・六〇
卷十二	一・八〇

◎送料各卷共・一〇

發行所 東京神田鍛冶町・鎌町ビル 振替東京一七八七二番 同志同行社

取次 東京・京大阪・林平書店 柳原書店

395
136

終

¥ 1.00